



傘をよこせ

光野 朝風

平常時における人間の運命は観測者の無意識の同意の多数によって決められる。

ここ連日休むことなく事故や殺人や自然災害や汚職のニュースが流れていた。一週間ほどは一度としてよいニュースが流れてくるのを見たことがない。

齊藤和也の働いている会社でも、ここ半年退職する人間が三人ほどいた。悪いこと尽くしだった。社内環境がぎすぎすして潰れる人間が多くなってきていた。正確に言うならば、潰されて辞めていくのだが。

それもこれも社会全体が落ち込んできて経済状態が悪くなってきているからだった。テレビでは毎日景気悪化の理由解説を学者やコメンテーターが説明している。朝から気落ちするニュースを眺めて済むはずはなく、出勤すれば連日部長の愚痴や嫌味が酷くて部下たちや和也も胃が痛くなるようだった。

ある日の帰宅途中、大きな揺れを感じた。和也は立ってられないほどの揺れに近くの街路樹にしがみ付いた。空を見上げると高層ビルが柳のように揺れている。月明かりすらも消えたと感じるほどの電光の中にいたが一瞬にして停電になり、空にキラキラと輝くものを察知して瞬時にガラス片だと直感し恐怖で反射的に体を伏せた。

しかししばらく経っても何も落ちてこない。揺れは何秒かあったが、すぐに収まった。街中のライトが戻り、暗闇が煌々と照らされだす。また揺れるのではないかと警戒しながら立ち上がり周囲を確認すると通りゆく人たちは何事もなかったかのように歩いている。

思わず近くの男性に「大丈夫でしたか？」と聞くと「はい？」と妙な顔をされた。

「え？今揺れましたよね。大きく」

和也が言うと聞いた男性は大きな声をあげて笑った。

「ああ、あなたこの街に来てあまり経っていないんですね。最初来た人はみんな驚くんですよ。よくあることです。あんな程度で驚くようならこの街には住んでいただけませんよ」

男性の言葉を聞いて驚いた和也は思わず反論した。

「ちょっと待ってくれ。俺はこの街で生まれてずっとここに住んでいるんだ。あんた、そんなデタラメ言っちゃいけないよ」

突っかかれた男性は「ちょっと、なんですかあなた。私だってこの街は長いんだ。知ったかぶって非常識な人だな。これ以上難癖つけてくるようなら警察呼びますよ」と怒り出したので和也はあわてて冷静になり手を引いた。

帰りの電車も通常通り運行していた。帰りのやや混雑している車内で周囲を観察し聞き耳を立てるが、先ほどの揺れの話をしている人は誰一人としていなかった。

生まれてから感じたこともない大きな揺れが起こったのに、交通機関が麻痺することもなく、

人々も平然としている。

(どうなってんだこりゃ.....)

電車から降りて駅を出ると気がついたことがあった。中心部は街中がライトアップされていて気がつかなかったが、妙に明るい。空を見上げると今まで見たこともないほど月が大きかった。ざっと見て二回り以上も大きくなっている。

一瞬月が落ちてきているのかと錯覚するほど迫りきているようだった。もしや地球に何かが起こったから先ほど大きな揺れが起きたのかと思ったが、何も知る由がなかった。

ひとまず家に帰ってテレビを真っ先につけた。発泡酒の缶のプルタブを開けてグビリと喉を潤しながらテレビのチャンネルを次々と変える。冷蔵庫の中の惣菜のあまりを口にしながら注意深く見る。バラエティー、旅、クイズ、動物番組といつも通りの番組内容。異変を知らせている字幕もないしニュースを見ても特に先ほどの揺れを放送しているところはひとつとしてなかった。

もしかして情報が遅れているとか、などとも思って見ていたが結局眠るまで特番や地震がニュースで流れることもなく静かに日を終えた。

何事もないに越したことはないと思えば、やはり昨日のことが気になった。あれほどの大きな揺れ、さすがに朝刊には載るだろうと新聞をくまなく読むが該当記事はなし。テレビでもそれらしい放送はまったくなかった。

しかし強烈な違和感に見舞われた。朝のニュースではどのチャンネルでも口を揃えて「本日のニュースはありません。昨日は事件ひとつ起こらぬよい日でした」という内容のことを言う。コメンテーターも「こんな平和な日がずっと続けばいいですね」などとお気楽なことを言っている。ニュースキャスターは「本日も健やかに穏やかに過ごしてください。いってらっしゃい」と昨日まで眉間に皺が寄っていきそうなほど緊張感をたたえて伝えていたがにこやかだ。新聞でさえも連日書き立てていた政治ネタや殺人、経済悪化、自然災害、海外ニュース、市民生活にまで影響が出てくるうんぬん、困窮・危機脱出最優先など、不安を煽るような記事は一切なくなった。

昨日まで続いていた一連の流れが突然途切れると何事もなくとも違和感を持つ。それだけ毎日煽りたてられていた。

大きな圧力がマスメディアにかかっているのか、情報統制でもされているのか、確証は持てないが昨日の揺れのせいで、この国に何か異変が起こったに違いないという強い勘繰りを拭い去れなかった。朝の番組は最後まで何らかの事件を伝えることなく天気予報まで来た。しばらく晴れの日が続いていくようだ。降水確率も0%を示していた。

昨日のことがまるで夢の中の出来事のように社会は動き出している。昨日揺れの直後に話した男も妙なことを言っていたのを思い出した。まったく話が噛み合わず自分が体験したと相手との感覚に齟齬があった。大きな揺れは、大きな月は、会社の帰りに体験した一連のことは錯覚か何かだったのだろうか。まるで大げさに驚いて勝手に内心騒いでいただけじゃないかと、あれこれ思っていたが、テレビの時計は出勤時間になってしまっていたので家を出ることにした。家を出た途端今日も部長の愚痴を聞かされるのかと落胆して体が落下する鉄アレイのようにズシンと重苦しくなった。

外に出てまだ月が見えるだろうかと空を見上げた。夜空一面にあった大きな月の姿はどこにも見えない。朝だから見えないのかと思いかけた時、いやいやと首を振って新聞にもニュースにもなっていないのだから、きっと大したことはないと気にせず歩いていくことにした。

空は晴天、雲ひとつない。天気予報が示した通りの状態だった。最寄りの駅から電車に乗り目的駅から会社に行く。満員電車、通勤通学の人々、傷一つないビル、いつも通りの車の往来、何一つ変わらない毎日の光景の中に明らかに違うものが目についた。ふとチラ見をした程度で会社に急いだが黒服を着て傘を差している猫が、というよりも着ぐるみか何かを被った人間なのだろうが、それが二人いた。テレビ番組か何かの撮影だろうかとも思ったが興味を示している暇はなく瞬時に通り過ぎた。わざわざ晴れの日には傘を差すとは日傘だろうか。しかしどうでもいいことのように思えた。

会社に着くとすぐさま同僚に声をかける。昨日の揺れのことを聞くと「何言ってるんだお前。テレビでもちゃんと何もなかったと言っているだろう。それだけ大きな揺れがあったらだいたい気がつくものだ。目眩でも起こしたんじゃないのか？お前最近見るからに疲れてるもんな。俺もだけど」と言うので本当に目眩を起こしたのではないかと心配になってきた。確かに誰も騒ぎ立てず平然としていた。自分だけが「地震が起こった」と思い込んでいた。そんな錯覚はあるのだろうか。訝しがっていると部長が出勤してきた。

「おはよう」

「おはようございます」

部長と周囲のにこやかなやり取り。その時も驚いた。何か嬉しいことでもあったのだろうか。会社に来て一度としてにこやかな笑顔で朝から「おはよう」などと言ったことはなかったのに。いつもぶっきらぼうに「おう」「おはよ」など、さっさと通り過ぎて不機嫌そうにデスクに向かう。啞然としていると部長が近づいてきて肩を叩く。

「どうした？体調でも悪いのか？朝の挨拶は基本だぞ。働きすぎで疲れているとは思いますが頑張ってくれ」

「あ、はい。すみません」

今まで一度として出てこなかった労いの言葉。喉がガラガラに乾くほど戦慄した。まさか後で辞めろと言われるのでは。いつも愚痴や嫌味ばかりの部長が俺へひどく優しい言葉をかけてくる。これはなんの意味があるのだ。邪推が汚泥の渦のように心の中をうねっている。何かがおかしい。何かがおかしい。何かがおかしい。

しかし日中何度も反芻した杞憂も思いすごしのよう過ぎ去っていく。退社時間、みんな残業をせず帰る。毎日残業地獄だったのにスパッと切ったように仕事を止める同僚たち。和也だけが仕事を続けようと机に向かっていたが「なんだ、お前帰らないのか。そんな仕事熱心でも女に持てないぞ。今はちゃんと家庭に充分時間を割く男が持てるんだからな」と同僚に背中を叩かれ「いや、まだ家庭を考える気は……」と言いかけた時に同僚の顔色が瞬時に険悪になった。周囲も一斉に和也に振り向いて刺すような視線を向けている。同僚は語気を強める。

「なんだと？じゃあお前もし付き合っただけで結婚を望まれたとしても断るのか。もし家庭ができたとしても家に帰らず家族を大事にしないつもりなのか。仕事ばかりして理由を付けて家庭に時間を

割かないつもりなのか。お前には人と付き合っていく基本的な気構えがまったくない！」

同僚の顔が憎々しげに豹変していく。だんだんと悪意が高まっていくように最後は怒鳴られ、冷水を浴びせられたように身を縮こまらせて弁明した。

「いや、そういう意味じゃないんだ。俺みたいな収入も才能も容姿もないような男に女なんて付き合ってくれないだろうと思って」

すると同僚の顔がふわっとにこやかになってくる。周囲も何事もなかったかのように視線を外す。

「なんだそんなことか。小さなことなんか気にしなくていいんだ。お前にはお前の長所がある。そういうところを好きになってくれる人をしっかりつかまえておけばいいんだよ。なんなら、俺も相談に乗るから」

「あ、ああ。わかったよ。ありがとう」

人間は日常の反復や予測から大きくそれる行為に対して不信感を持つ。和也の違和感は募る一方だった。態度がおかしい。会話がおかしい。自分にストレスが溜まりすぎていて人の行為を素直に受け取れなくなっているのではないかと自らにも疲労の影をにじませていると部長が退社時刻だというのに珍しく声をかけてきた。

「斎藤君、もし時間があるなら一緒に飲まないか。君もだいぶ疲れているみたいだけど、まあ息抜きだと思って、私が奢るから」

和也は大げさに声を上げて驚いてしまい、確認をとってしまった。

「え？奢りって、部長からお金払っていただけるってことですか？」

ケチなことでも有名な部長が自分からお金を払うことは天変地異だった。奢られた後理不尽な物言いをされるのではないかと。恩をかぶせて一番汚い仕事でも回してくるのではないかと。和也が迷っていると、部長の機嫌が悪くなってきた。

「なんだ。俺と一緒にいきたくないのかお前は。お前まさか俺と一緒にいるのが嫌なんじゃないだろうな」

「あ、いえ、全然、そんなことないですよ。いや、部長からの申し出に感激しちゃって、あの、感動で安心してたんです」

白々しい言い訳だが思いの外部長の機嫌が直ってきた。上機嫌で肩をバシバシと叩く部長。待ちきれないように催促されて飲み屋へと向かったが、途中和也は拒否した時に感じる重苦しい悪意の視線や言い草を思い出し気になった。皆大げさすぎないだろうか。恨みに近い感情を抱かれるほどのことなのだろうか。それとも自分の会話がいけないのだろうか。

なるべく作り笑顔を崩さないように部長の話を聞きながら外を歩く。飲み屋街の中へと入っていくと人ごみの中に朝見かけた黒い日傘を差した猫が通り過ぎた。振り向くともう見えない。「あれ？」と声を上げる和也に「知り合いでもいたのか」と聞くので「いや、人間の大きさの猫を見かけたので」と素直に告げると「残念だがこれから行く店はそういう店じゃないぞ。普通の居酒屋だ」と笑われ、説明しても勘違いされるだけだと思い、それ以上は言わなかった。

居酒屋に入り遠慮がちに注文をすると部長が「遠慮するな。俺の奢りだからな。晩飯も食べてないだろうからな」と言ってくるので「はあ」と気のない返事をしながらも断りきれずに注文を増やした。

ちらちらと盗み見るように部長の顔色を伺う。先ほどのように機嫌を悪くしてはいけない。「しかし」と和也は思った。

――まるで世界がひっくり返ったみたいだ。

それは周囲が話している会話でもわかった。会社員がよく来るような大衆居酒屋。和也も初めてではないので、だいたいの周囲の会話内容もわかる。みんな酒を飲みながら愚痴のひとつはこぼしそうなものを誰一人として喋らない。それだけでは違和感を持つほどでもないが、口を揃えたように「平和だ」「幸せだ」「明日も同じだといひ」という内容が話されている。

節約の面から頻繁には外食はしないが、先週来た時は平和や幸福を口にする会話などなかった。これだけ「平和」や「幸せ」で周囲の会話が埋め尽くされると、まるで怪しげな宗教団体の施設に入り込んだような気分にも似てきていた。

部長はどんどん酒が入ってくるが和也は酔えなかった。飲め飲めと催促されて同じようなペースで飲むが、部長は赤ら顔で呂律も多少怪しくなっているのに対し和也は警戒心が取れず慎重を重ねて飲んでた。

会話の内容も前日の酷さとは打って変わっている。「期待している」なの「心配」なの「もし辛かったら休んでいい」なの一度も聞いたことのない言葉が行列をなして祭りをしているようだった。店に入ってからというものの一度として不愉快な言葉も態度もない。まるで人が違ったようだと感じた。

そのうち尿意を感じ手洗いへと急ぐ。用を済ませ手を洗う。目の前にある鏡にトイレの個室が見えたが、その時個室のドアがゆっくり開いて中に大きな人の形をした猫が血まみれで倒れている姿が見えた。顔は歪んで、殴られたような様子だった。

「うわっ！う、嘘だろ？」

声を上げた和也が瞬きした直後に鏡に映ったものは吐いたまま倒れている男性だった。目の錯覚か、それとも信じられないような思い込みでもしてしまったのか、和也は「酔いすぎた」という思考で、その場は帰結した。

手洗いを出た時にはだいぶ足に来ていた。抑えながら飲んでたと思い込んでいたが酒量は部長と合わせていたのだから少なくはなかった。どこか張り詰めていた緊張が緩んだのか酔いが回ってきていた。先ほどトイレの個室で倒れている男のことが多少気になったが助けるまでもな

いか、と高を括って席に着くと、しばらくして救急車が来て先ほどの倒れていた男性を運んでいった。

「うわっ、しまった」

と和也が倒れていたのを見つけた時点で店員に知らせるなりしていれば、もっと早く救急車が来ていたのに、と後悔したことが口から漏れると「どうしたんだあ？」と部長が酔っ払いながら聞いてきた。

「さっき、あの人が倒れてたの手洗いで見たんですよ。その時呼べばよかつ……」

と言いかけると部長は話を遮り「なんだとおう？酒飲んでぶっ倒れたのは、あいつの自己管理が悪いんじゃないか。別に気にするこたあないよ」と他人行儀に言い放った。

「いや、でもですね……」

と口火を切ろうとすると、視線に気がついた。他の客に盗み見られている。中にはあからさまに見ているものもいる。和也が次に何を言うのか聞き耳を立てるように周囲の存在が集中しているということを悟り、すぐさま手の平を返した。

「そりゃそうです。自己責任です。いい大人になって酒もちゃんと飲めないようじゃ子供ですよ。痛い目にあって当然です」

と大げさすぎるほど発言に色をつけると周囲の雰囲気は元通りになっていった。

ふっと入道雲を吹き消すように酔いが醒めた気分だった。

(ただ、また拒否しようとするすると周囲が注目してくる。何故だ。拒否してはいけないのだろうか)

「ビール二つお待ちどうさま」

自己管理が、というわりには随分飲むものだと思われてきたビールを見ながら思った。頼んだ当の本人は酔っ払っているのが楽しいのだろう。もう話の内容も脈絡がなく、突然終わったり始まったりを繰り返して意味を成していなかった。和也は聞いているふりをしながらジョッキを眺めていた。ジョッキの中の泡は窒息しそうな小魚のように勢いよく水面へと上がってくる。シュワシュワと炭酸のはじける音を聞きながら見つめていると、ふっとジョッキが遠くなっていくような感覚に見舞われた。

遠くなった感覚で店内を見るとチラチラと猫が紛れ込んでいる。何度か見たような気がする人の形をした猫だ。

「あれ？酔っ払った」

何度も強く瞬きをして天井を見て独り言を漏らす。目の錯覚か、酔っ払いすぎか、判別できないほど意識がぐらぐらしてきていた。部長がビールをぐっと飲み机に頭を垂れて言う。

「こらあ、まだ話は終わってないんだぞ」

「ああ、すいません部長」

部長と同じように机に頭を垂れて謝る。

「何言ってるんですか。新入社員みたいに腰が低いんですから社長は」

次の瞬間聞こえてきたのは女性の声だった。周囲を見渡すと和也を取り囲むように数人の人間がいた。驚き「うわっ」と声を上げて立ち上がると人間は猫の顔になり煙のようにすっと薄くな

っていき消えていった。

「おい、どうしたんだ。まさかいい年こいて漏らしたんじゃないだろうなあ？」

部長がニヤニヤしながら聞いてきたのを目蓋を一度ぐっと下ろしてから見つめ直した。きつねにつままれたような顔をしながら部長を覗き込む。

「な、なんだ。そんな顔近づけてきて。まさか、本当にやっちゃまったのか」

部長の言葉にはっとして、首を大きく振る。

「え？そんな、ええ、そんなわけじゃないですか。いや、部長かっこいいなと思って」

その後の部長の上機嫌さは抜いたシャンパンのコルクのように上がっていった。和也は部長の機嫌をうまく取りながら、今日は二人とも酔っていて明日の仕事もあるので帰ろうと穏やかに説得した。

ケチな部長が財布の中からお金を出すまでは油断はできないと西部劇の決闘時のガンマンのように懐の財布を握りながらレジ前に立った。

しかしここでも思い過ごしに終わった。お金を払っても上機嫌の部長。外に出ればみんな笑顔で歩いている。晴れ渡る夜空から酔いには心地よい風がさわやかに降りてきている。今夜の月も大きかった。

「あれ、今日も月が大きい」

と和也が口走ると「何言ってるんだ。酔っ払いすぎだぞ。いつも通りの大きさじゃないか。斉藤くんは詩人だな」と言って部長が笑った。

酔っ払っているせいか、相手の反応に驚きがなくなってきた。満足して部長と別れ、電車に乗り帰り道に変わらぬ大きな月を見る。最初はまるで別世界に迷い込んだような衝撃だったが、誰に聞いても自分だけが違った感覚でいることが変なのではないかと思うようになってきていた。みんなが一言も否定しないのなら、きっと間違いないだろう、と。

酔いにふわふわと体を浮かせながら先ほど「社長」と呼ばれた幻を思い出す。昔ヨーロッパに旅に出た時ドイツ、フランスやイタリアの家具に酷く感動を覚え、「このすばらしいセンスを日本の人たちのセンスにも加えていきたいものだ」と考えたことがあった。その時起業しようかと計画を練ったが、元手が少なく先行きを不安視する周囲の声に断念したという経緯を思い出した。

――もし、起業していたら、少しはうまくいっていたのかな。今からでも……

と先ほどの部下たちに囲まれていた幻を膨らませて想像してみた。部下と居酒屋で楽しく談笑する姿。きっと帰りにはタクシーは使わず「お金は節約する時にはして、ここぞという時は使う」をモットーにして、部下をよく労い、職場結婚の結婚式で祝辞を述べたり、その式場で話の弾む女性に出会い、意気投合し結婚。子供は男の子が二人に、女の子が一人。

まるで落ちていくかのように違和感なく想像の世界へと入っていける。何が起こってどんな生活をしているのかも生々しく想起できることに楽しささえ覚えていたが、光り輝く想像の世界に手を伸ばし、妻の手を取ろうとすると突然「パキン」という電気がショートしたような金属が激しくぶつかったような音を出して妄想が弾け飛んだ。

――弾かれた……？

再度妄想しようと思っても自分が今まで何を考えていたのかさえよく思い出せない。頬をぶたれたような頭の衝撃だった。

——もううまく思い出せない。どうしてだ。確か社長……思い出せない。もしかして、その世界には行くことができないってことか。

酔っ払ってはいたが、酔いのあいまいな感覚ではなく、もっとしっかりとしたものであったことは、嫌に肌が覚えている。

——俺はあの世界を生きていたのか。いや、生きている？きっと、もうひとつの可能性の世界だ。違う世界の俺の、成りうることができた世界。今はもう弾かれていけなくなってしまった世界。

和也にそう思わせた「生々しさ」は「疑似体験」と言うにはあまりにも血に吸収されつくし脳裏に焼きついている。錯覚とも違う。デジャヴューとも違う。確かに今違う世界の自分とここにいる自分は重なり合っていた、と確信させるほどだった。しかし、ここにいる自分はただの酔っ払いで会社の社長でもない、ただの下っ端会社員だ。

ぼんやりと大きな月を見上げながら思う。酔いの脳にいつもとは違った思考がアルコールに毒されて流れてくるようだった。あの月に違和感を持つものはいない。朝から妙なニュースが流れたと思ったら社会はその通りに動いている。否定や不幸せなんて許されない。ずっと周囲に気を使い、何度も慌てて言い直した。言い直すまでの間は、俺が世界を否定し壊すかのような憎しみの視線を受けていた。変なことが起こりだしたのは大きく揺れてからだ。俺だけが違う世界に来たのか。

——ここはどこなんだ……

ため息をついてうなだれると街灯の光の中に傘を差した猫がいる。何度も見た不思議な人型猫だ。傘から手を差し出しながら、まるで雨が降っているのを確かめるかのように立っている。つられて空を見るが、相変わらずの雲ひとつない晴れた夜空だ。

「お前か。もしかしてお前が俺をここに連れてきたのか」

和也が猫に言い寄っていくと、猫が目をはっと見開いて凝視した。

「君は揺らぎが観測できるのか」

開口一番の妙な言動に「またか」と和也は身構えた。地震が起こった後の人のように話が噛み合わなくなっていくのではないかと警戒した。猫の姿とはいえ、この世界では「常識」なのかもしれない、という精神的適応力が既に働いていた。

「ああ、すみませんでした。酔っ払ってて」

と去ろうとすると猫は「待ちたまえ和也くん」と呼び止めた。

「なんだと？」

和也はキッと睨み付けるように猫に振り返った。不信感が一気に引火して燃え上がる。

「やっぱりお前の仕業か。どうして俺の名前知ってるんだ。お前たちが絡んでいるんだな。俺をこんな変な世界に連れてきて、俺に何をしたんだ！」

「まあ、落ち着いて」

酔いの勢いもあって殴りかからんとする剣幕の和也を猫は空いた右手を胸にあげて制止させる。

「落ち着いていられるか。お前らが何かしたんだろ！」

拳を振り上げる和也に「僕を殴ったからといって世界は変わらない。君は今人間が観測できないものを見ているんだ」と、また意味の通じないことを口走った。

「くそっ！猫の分際で。アニメじゃあるまいし」

和也の言葉に猫はクスクスと笑い出し「猫？そうか、君には猫に見えるのか。なるほど、何にでも成り得るわけだ」と一人で頷き納得していた。

「どういうことなんだ。説明しろ。お前が誰なのかも」

猫の能天気な言いぶりに体が震えるほどの怒りを抑えつけながら冷静に聞こうと努めた。

「いつから見えるように？」

と聞く猫に今まで起こったことの一部始終を話した。すると猫は「ふうむ」と唸って「これは証明ができないからあくまで推測だが」と話し出した。

「僕らの世界では地震が起こらなかったから、よくわからないんだが、ちょうど数ヶ月前に他の地域で巨大地震が起こった。その時、地球の自転時間が千万分の十八秒も短縮された。君が体験した地震はどの程度のものかはわからないが、君は地震のせいで世界の揺らぎの中に放り込まれたようだね。ほとんどの人はぶれが小さいため、ぶれが起こっても揺らぎの収束をするので気がつかないが、君のぶれは大きかったから、前の世界との比較が容易にできるのだと思う。君は猫が見えるようになったと言ったが、それは可能性範囲の世界を見ているのだと思うよ」

「可能性範囲の世界とは何のことだ」

酔っ払いの頭にはひどく難しい話だった。聞いているだけで吐きそうになってきていた。

「人間の感性に訴えるには、酷く難しい話だが……世界ではすべてのことは同時に起こっている。しかもその起こっていることは起こり得るすべてのことが同時に起こっているんだ。たとえば言うなら、僕らは死と生を同時に内に持っている。金持ちにもなっているし貧乏人にもなっている。すべての起こり得る可能性を確率的な範囲内で内包しているんだ。そしてそれらの一見矛盾するものは別世界で個別に起こっているのではなく、今も同時に起こっている。そのことを可能性範囲世界と言っている。ところで、君のお父さんはSF小説が大好きなのを知っているだろう？」

「うん？確か書齋の本の半分はそうだったような。今は実家暮らしじゃないし書齋に入ることもないからわからない」

「なら君は六歳の頃に書齋に入りSF小説を手に取り、文字が満足に読めなくて小説を放り出したことも覚えていないのだろうね」

——六歳……？

人間は社会人として生活を営む中で、小さな頃の細かな記憶まで逐一覚えていないものだ。徐々に忘れていく。和也は首をひねった。先ほどの話が右から左に抜けていくように頭の中に入ってこないが、記憶を探ることぐらいはできた。しかし自分の行動が思い出せず、父親の書齋の雰囲気だけが思い出される。どのような本があったかも詳しくはわからなかった。

「思い出せないか。しょうがないね。違う人生を歩んでいるのだから。実はその書齋の中には科学雑誌もあった。SF小説ファンだから興味もあったのだろうね。机の上にあったのだが、これは文字だけではなく写真がついていた。宇宙の写真や分子や原子や生物の写真や自然の写真や恐竜のイラストを食い入るように僕は見た。その写真を見た時の興奮や衝撃を忘れられなくて科学者になろうと思ったんだよ」

酔っ払っていて頭からスルスルと話が滑り落ちていく中、妙に感じた。

「……うん？待て。お前は今書齋で科学雑誌の写真を見て科学者になろうと思ったと言ったな。お前は誰なんだ」

「可能性範囲世界の中にいる、他の人生を歩んでいる君だよ。斉藤和也くん」

「なんだって？だって、お前は猫じゃ……」

と言い掛けた和也の言葉を笑い飛ばす。

「はは。物質の根源は何にでも成り得て何でも無い。すべてのことは同時に起こっていてすべての起こり得ることを内包している。違う世界で起こっていることでもなく今この瞬間にも起こっていることなんだ。君はどうしてなのか本来人間が見えないものを見ている。君自身の観測点が揺らぎと同じようになっている可能性すら考えられる。とても危ないことだ」

「なんだこいつは。何を言っているんだ……あっ！」

混乱する和也の頭の中に微かにふっと「社長だった自分」がよぎった。詳細は思い出せなかったが大きな音を立てて別世界から弾かれた自分のことはありありと思い出せた。

「そうだ。確か、俺は他の世界に弾かれた。よくわからんが、すべてのことが同時に起こってその可能性を含んでいるなら、どうして俺は今すぐ輸入家具会社の社長になれないんだ」

猫はニヤリと笑う。

「常識的な感覚からすれば支離滅裂な質問だが、よいところに気がついている。それは馬鹿らしいようで簡単なことだ。つまり、世界は人間の脳が決めているからだよ」

和也は眉間にしわを寄せる。

「ますますわからない。どういうことなんだよ」

「すべての起こり得ている可能性範囲の世界まで認識してしまうと人間は人間ではいられなくなる。当然その一個人を観測している他人においても、その性質は変わらない。精神というものを世界が取り込んで自分が認識できなくなる。人間は精神がなくては自分を維持できない」

「じゃあこの世界は精神世界？」

和也は必死に自分の知っている知識に物事を置き換えようとしていたが、どれもこれもしっくりこない。この話はただのファンタジーなのではないかという先入観が、和也の知っているファンタジー世界の単語や世界観を羅列していた。猫は少し困ったような顔をして説明を続ける。

「人間の感性で理解するには難しい話だよ。そもそも人間の認識において問題となるのは、すべてのことが同時に存在し同時に起こり得ていることを世界が内包しているにもかかわらず人間は過去を筋道立てることでしか認識することができないということなんだ。これが人間の限界であり君たちの社会の限界点を常に決め続ける。これが脳あるものが持っている物理的限界点でもある。そして物理限界の中で可能性世界の連続点を移動し続けている。君たちの世界では、この脳の機能を因果率と呼んでいる。つまり、因果は世界で起こっていることではない。脳で起こっていることなんだよ。厳密に言えば、脳そのものが世界の可能性のブレを収縮し、観測点を決めてるんだ。しかも観測点の連続は道筋だっていなければならない。今の君がすぐに僕になれないのと同じさ」

和也は電柱に片手をついてもたれかかった。

「何を言っているんだ。まったく理解できない。気持ちが悪い。吐き気がする。まるで宗教の勧誘のように永遠と口説かれているみたいだ。俺は洗脳か何かされているのか」

喉を抑えつけながら嘔吐感を胃へと押し戻す。猫はため息をついて（猫の表情を掴み取るのは難しいが）少し諦めたような呆れたような顔をしながら言った。

「やっぱり、今の君には難しい話だね。それだけ今の現実が長いから」

和也は過呼吸になりそうだった。激しく息を切らし、ついに内臓の奥からめくれ上がってくるものを外へと吐き出した。和也の様子を悲しそうな目で猫が見つめて言う。

「どうしてそこまで世界のことを知りたがるんだ。今の社会を認めて周囲を受け入れればいいだけの話じゃないか。そうすれば楽になれる」

強い主張もない。哲学感や政治的思想もあるわけではない。ただ「納得がいかない」という理由だけで和也は食い下がって質問をすることを止めるわけにはいかなかった。

「聞きたいことは山ほどあるんだ。じゃあどうして否定的な言葉を吐くと周囲の人間があれだけ憎しみを持つんだ」

「世界を否定することは、人間そのものが許さないからだよ」

「どうして」

「それは僕が説明しなくても君たちの常識感覚で簡単にわかることじゃないか。ただ、どうやらこの世界の人の反応は直接的だね。陰口が直接的に出るだけだと思えばいいことさ。隠すか隠さないかの問題だよ」

人前では良いふりをしてお世辞で人間関係を円滑にする。そして発散できない鬱憤をどこかで晴らす。時として鬱憤は陰口となる。この世界じゃなくてもやっていたことだった。

「戻る手段はないのか」

和也は一度咳き込んで痰を電柱に吐きつけた。口の中が胃液で苦くなっている。

「君は前の地震でおそらく千万分の何秒か早い時間に放り出された。君が認識している世界は前

に認識していた世界とは違う。君だけ観測点の数珠のような連続から大きく外れてしまった。そして戻る手段を永遠に失った。通常人間は物理法則に逆らうことができない。観測し、認識しているのは人間でも、星ひとつ操れないように大きなものに対して人間は無力だ。世界は人間の意志で自由になるわけではないんだよ」

「おかしいだろ、矛盾している。ええと……ああっ、くそっ！」

酔いのせいで論理的思考ができず、組み立てようとしてもガラガラと崩れる。頭の大きな揺れに組み立てたものが音もなく崩れ去っていく苛立ちに、壁を蹴った。はたから見れば一人で暴れているのだから、ただの酒乱にしか見えない。

「矛盾か。矛盾ってロジックだよ。論理なんて網の目のように穴だらけじゃないか。そしてもっとも人間らしい限界だ。人間から見れば矛盾でも成り立っているのが世界だよ。僕は傘を差しているけれど、晴れの日には差すのは日傘の類が最も一般的で、雨の日には傘を持っていたとしたら差すか差さないかの二択しかないと考え、それ以外の可能性はまず考えられないだろうと思っ込んでいたならば、君の思考は既に限界を迎えているんだ。その限界を他人と共有することで、君は精神的な安心を得る。自分の観測点の連続が間違っただけではないと他人の思考と連結させるから」

人は理解できないものや今まで慣れ親しんだ理解を侵害するものが思考に多く入り込んでくるとたちまち拒否反応を起こす。和也はぐらぐらんと回るような気持ちの悪い状態で叫んだ。

「嫌だ！ 帰りたい！ 元の世界に戻りたい！ あああ！」

ついに路上で泣き出す和也を猫は優しげな声でなだめる。

「何を否定することがあるんだい？ どんな世界だろうと人間が関わっているからには可能性がある。この世界の常識に従って他者から憎しみや怒りを無闇に買わないようにすればいいじゃないか。どんな世界であろうと他人の幸福を育てられる人間が一番人間社会の恩恵を受けるものだ。この世界でだって幸せはつかめるものだ。もしかしたら前のほうが悪い結果になるかもしれないじゃないか」

——俺はきっと洗脳でも受けたんだ。そうとしか考えられない。どうしたら洗脳が解ける。俺が感じている世界が一日で変わるなんて、そうとしか考えられない。昨日までずっと続いていたじゃないか。こんなろくでもない屁理屈に付き合っているのか。何が俺だ。似ても似つかないじゃないか。ん？待てよ。同じ世界に俺だと言う似ても似つかないやつが二人もいるのはおかしいじゃないか。違う可能性の俺で別世界の俺でもないってことは、こいつは何になるんだ。

和也はじっとアスファルトを見つめながら思考する。流した涙は頬で既に乾いている。そして居直り相手を見据える。

「お前、どうして別世界じゃないならお前と話せるんだ。俺は一人じゃないとおかしいじゃないか」

すると困る様子も見せずあっけらかんと言っている。

「その通りだよ。もちろん。ここには一人しかいない」

「なんだって？」

「君は自分の脳と話しているんだよ」

和也は言葉を失う。

「君は可能性範囲世界の中の大きな揺らぎの収束をできないでいる。それは人間の認識の観点から言っても危ない。揺らぎの収束そのものがいまいになっている。君の主観では世界はもっとあいまいになる危険がある」

「つまり何が起こるんだよ」

「簡単に言えば他人からは精神病みたいな扱いを受けるってことだね。目眩のような幻影のような現象も多くなるのではないかと思う。本当はもっと複雑だけど先ほどみたいに混乱させたくないから、もう止めておくよ。また揺らぎの幅が大きくなりそうだ。僕は消え……」

言い終わらない間に猫の姿は消えていく。残されたのは和也の吐瀉物だけだった。それだけが和也に関わる唯一の現実のように感じていた。あまりの妄信的な話拒否反応のほうが遥かに強く、一刻も早く先ほどの出来事を忘れようと努めた。理解もできない馬鹿な話を信じるやつがどこにいるのだ、といささか怒気を含みながら、何度も胃から込み上げてくる不快感を喉でせき止めながらようやく家へと帰りベッドへと朦朧とした意識のまま倒れこんだ。

次の朝目が覚めると少しだけ頭が痛い。二日酔いも思ったよりかは軽いが、それでも少し目眩を感じていた。気がつくときシャツとパンツだけで寝ていた。背広やズボンやネクタイなどが足跡のようにベッドまで点在して続いていた。ベッドに倒れたことは覚えていたが背広を脱いだ記憶がない。習慣とは意識がなくてもできるものだな、とクシャクシャになったズボンを拾い上げてズボンプレスナーに挟んだ。

まだ覚め切らぬ頭でぼやけた視界の中洗面台まで行き歯を磨く。鏡の中には目の下にうっすらとクマを残して髪をぼさぼさに爆発させている冴えない男が映っている。まだ夢の中のような気持ちでいた。特に映画のように別のものが突然映るということはなかった。猫の話はすっかり忘れていたが不快感だけがあった。朝から不愉快な気持ちが足元から這い上がってくる無数のナメ

クジのように拭い去れない。和也の心の中には否定的な言葉や罵倒が数多く浮かんで来て、猫の存在を感情的に否定するのみだった。

顔を洗い終わって少しだけ気持ちが洗い流されると玄関から新聞を取ってくる。広げると一面に「本日のニュースは何もありません」という見出しから入り新聞社の社員たちが昨日いかに幸福で平和に過ごしたかを書き連ねていた。

和也は新聞を投げ出し「くだらない」と口から出した時、自らの違和感に気がついた。――他人の幸福が「くだらない」だと？いや新聞とかメディアっていうのは、もっと価値のある情報を流すものだろ。いや、それだと幸福にあたかも価値がないみたいな言い方になる。じゃあ俺が今まで過ごしてきた事件やゴシップや政治のスキャンダルには価値があったのか？政治は生活に直結しているし、自分たちの国や生活がどうなるのか、誰だって心配だろ。でも、この世界の人たちはなるべく他人に幸せを与えようとしているのではないのか。それに従ってれば、俺だって昨日みたいにいざこざを起こさずに平和に幸福に生きられるんじゃないのか？

そう思いながらテレビをつける。テレビの内容も昨日と同じだ。

「本日のニュースはありません。昨日は事件ひとつ起こらぬよい日でした」

どこのチャンネルを見ても同じ論調で番組が進んでいく。キャスターがコメンテーターに意見を求めると、自分がいかに幸福に過ごしたかを自慢げに話している。

冷蔵庫の中のタッパーに入っている残りご飯をレンジで温め、梅干を乗せる。味噌汁はインスタントでお湯を注ぐ。椅子に座りご飯を眺める。

――そうだ。毎日に起こっている幸せに感謝すればいい。簡単なことじゃないか。こうしてご飯を食べられることだって幸せだし、働いていることだって幸せなんだ。何も違和感がないじゃないか。今まで事件の毎日で明日をもわからぬ物言いに囲まれていたほうが異常だったんじゃないのか？きっとそうだ。そうに違いない。

考え方を改めることによって和也の中に心温まる気持ちが浮かんで来た。少々のに目を瞑れば、別に気にするほどのことではない。小さなことにこだわるのはもうやめよう。晴れ晴れとした気分で家を出た。

心が幸福だと感じると日の光さえ祝福の飛沫に見えてくる。今日は思い切り他人と幸福を共有しあおう。もっと幸せな気分になれるに違いない、と思うと会社への足取りも軽やかだった。

しかし、出勤途中で足止めを食らった。電車で人身事故が起こり一時間以上も止まってしまった。場所は二駅先で起こったようで、ちょうどホームで待っていたところに放送が流れた。朝の軽やかな気持ちも急にズンと重くなり、これでは昨日と何も変わらないじゃないかと苛立ちながらいると、周囲の様子がおかしくなり始めた。それもどこからか流れてきた「たった一言」だった。

「どうやら自殺らしいぞ」

「えー？自殺？ありえないし。学校遅れちゃったじゃん」

「自殺なんてするやつの気が知れないな。頭でもおかしかったんだろう」

「みんなの邪魔をするなんて屑だ。本当にどうしようもないやつ」

「役立たず。社会の敵だよな」

「取引先に遅れる。社会のゴミのために遅れたなんて言うのは勘弁して欲しい」

ざわざわと悪意が広がっていく。中には口汚く罵倒するものもいた。みな口々に論調を合わせていく。和也は自分が先ほど苛立っていたことも忘れて憤りを覚えた。

「お前たちおかしいだろ！人が一人死んでるんだぞ！」

「しまった」と思った時にはもう遅かった。周囲の悪意は殺気のように鋭くなり和也の全身を貫いてくる。「何だとお前。お前も屑の仲間か」と背広の男が胸倉を掴んでくると、和也は必死に叫んだ。

「すいません。すいません！」

次に何か自分を擁護できて相手を拒否しないことを言わないと自分が社会から抹殺されるという危機感から咄嗟に思いついたことを口走る。

「母が！母が死んだんです！病気で死んでしまったんです！この前死んで悲しくてやりきれなくて苛立ってたんです！ごめんなさい！ごめんなさい！」

すると胸倉を掴んでいた男も周囲の人間たちも急に同情的な視線に変わり「すまなかった」と男は深々と頭を下げて謝り、周囲の論調は和也に同情的なものになっていった。

――た、助かった。

咄嗟の襲い来る恐怖からの解放に深々と安堵のため息を吐きながら嬉しさを感じ涙ぐんでしまった。

――もう逆らうのは止めよう。俺の生活がおかしくなる。従っていて何も不自由がないのなら人が一人死んで周囲にあわせて罵ることぐらい、そのうち違和感がなくなるさ。

心の中で乾いた笑いを闇の底へと落としていくような気持ちだった。落とした笑いは闇の底から湿っぽく響き渡ってくる。

――俺は幸せだ。他人の不幸せなんかしったことか。俺の幸せを邪魔するようなやつや周囲の幸せを邪魔するやつはダメなやつってことなんだろう、そういうことなんだろう。

朝の時間だけ感じた潤いが、たちまち蒸発して咲きかけていた花々を枯らしていくようだった。

会社へと遅刻の連絡を済ませて、ようやく出社したはずが、社内の仲間たちの視線が厳しい。心当たりのない和也は「遅刻したせいか」と思った。どう考えてもそれ以外に他人の厳しい視線を浴びる理由が思い浮かばない。

部長が和也の近くまで来るのに気がつくと、立ち上がり昨日のお礼をしようと頭を下げた。

「あ、部長。昨日はありがとうございました。ホント、いい店でしたよね。おいしかったですよ。またさそ……」

お世辞を言っても厳しい視線を崩すことなく和也の言葉を低い声で遮って喋りだす。

「お前、屑に同情的なことを言ったんだって？お袋さん、この前死んだって言ったそうだが、葬式いつだったんだ」

「え？」

――まさか、誰か聞いていたのか。ど、どうやって誤魔化せばいい。

全身の血が冷え込み、ねとりとした汗が額から氷柱のように下がってくる。

「え、そ、そんなこと言ってませんよ。そんな根も葉もないうわさ、どこから出たんでしょうね？」

引きつりそうな口元を満面の笑みへと全力で変えて取り繕おうとするが、部長は拳を作って強く机を叩いた。机の上の書類が驚いて跳ねたように見えた。

「ふざけるな！昨日からお前、なんかおかしいぞ。みんなが幸せに暮らそうとして、どれだけ努力して平和を保っていると思っているんだ。社会の癌をかばうような真似は許さんぞ。お前のようなやつが将来のみんなの不幸を招くんだ！」

和也の焦りは脳をスポンジ状にしていく。もはや冷静に考えられなかった。

「違います。誤解です」

「何が誤解だ。じゃあ俺に伝えてきてくれた人間は嘘つきだと言うのか」

——あ、これも否定に入るのか。

打つ手はなかった。巧みな知恵で機転を利かせることもできなかった。ただうな垂れ心細そうに「疲れているんです」と言うことが精一杯だった。それ以外の下手なことを言えば次はどうなるかわからないという恐怖感が次々と浮かぶ言葉を奪っていった。

「そうか。なら今日は帰れ。仕事にもならんだろうからな。ただしな、家でよく頭冷やしてこい。わかったな」

語尾を強く和也に叩きつける。「はい」とか細い声で従うしかない和也はしぶしぶと針のような視線のトンネルをくぐって家路についた。途中の電車の中でも時折チラチラと盗み見られる。悪意の伝染は早かった。「悪事千里を走る」という諺は、この世界でも形を変えて存在しているようだった。

家の近くの駅を降りて歩く。民家の塀の上に三毛猫が一声鳴いてじっと和也を見た。

——猫……そうだ、猫。今日は猫が見えなかった。人型の。色は、どんな猫だ。思い出せない。猫、いたよな。昨日いた。傘を、ええと、傘、晴れの日の傘で……思い出せない。いや、そもそも、俺猫なんて見たのか？俺は俺と話してて。くそっ！どうしてこうなったんだ。

再び猫のことを思い出そうとしてもうまく思い出せない歯がゆさが、どこまでも逃げ出したい恐怖を運んでくる。そしてある言葉を思い出した。

「雨の日に傘を持っていたとして差すか差さないかの二択だけだとしか考えられなかったら既に思考は限界を迎えている」

発想を変えようと考えた。晴れの日に差す傘には何の意味があるのか。日傘でも雨傘でもない傘は何か。特定の選択肢から逃れる秘密は傘にあるのではないか。傘に秘密があるに違いない。

——傘を、よこせ。

「俺、出て来い。俺、俺、俺俺俺俺」

念仏のようにぶつぶつといい始めるが、何一つ変化はない。塀の上にはいた三毛猫も姿を消している。

何故出てこないのか。自分はこの世界にいたくはない。がっくりと肩を落とし、家に帰りぼんやりしていると、突然悲しみが込み上げてきて泣き崩れた。どこにも逃げられない。この世界でうまくやっていくしか手段は残されていない。前の世界がどんな世界であったかもぼんやりして

きていた。

夜中、月を見上げる。真珠のような美しく大きな月だった。部屋を暗くしてビールの缶をいくつも開ける。冷蔵庫の中に残っていた半リットルの缶を四つ全部飲み干す。テレビにも新聞にも人身事故のことは何一つなかった。人の不幸に目を瞑ることで幸福を維持しているのではないかと疑問が浮かんだが、確かめる術はなかった。朝の人身事故を起こした誰かに、ビールを飲みながら心の中で「どうか安らかに眠ってください」と祈りを捧げた。

次の朝、出社しようと準備をする。新聞もテレビも、昨日と同じだった。

「本日のニュースはありません。昨日は事件ひとつ起こらぬよい日でした」

冷ややかな気持ちでニュースを見る。

「人が死んでも、ゴミが掃除された程度にしか感じてないのか」

昨日の駅での出来事を思い出し、インスタント味噌汁を眺めた。湯気はため息に吹かれ、ぐらりと折れ曲がり、元に戻って揺れている。熱気に当てられて上昇する湯気が不安定で不確かなものを思い起こさせた。

嫌なことがあろうと会社には出なくてはいけない。人間社会は労働する人間によって維持されている。

——前の世界と、少しだけ社会の理屈が違うだけだろ。

いつも通り、玄関を出る。最寄の駅のホームで電車を待つ。周囲の視線が痛いほど気になったが、関係ないと思い込むようにした。

——俺は生きている。生きていればなんとかなる。殺されるわけじゃあるまいし、気持ちを切り替えて生きていかないとな。

腹に力をぐっと入れて心が崩れないように保つ。込み合ってきたホームで足を一步前に出す。列の先頭で白線の前で待とうと白線ギリギリまで足を持ってくると、はっきりと声が聞こえた。

「君は前の地震でおそらく千万分の何秒か早い時間に放り出された」

「君自身の観測点が揺らぎと同じようになっている可能性すら考えられる」

「え？」とホーム側へ振り向いた時、既に和也の体は線路側へ傾きつつあった。その時、傘を差した猫の姿がすぐ後ろに見えた。

——傘……あの傘を掴めば……

頭を瞬時に駆け巡った思いから傘に手を伸ばす。

——傘を、よこせ！

そしてまた声がした。

「君はもうすぐ死ぬ」

和也の体は線路側に完全に傾く。その感触は誰かに押されたようでもあり、強烈な重力を感じ吸い込まれるようでもあった。掴み損ねた傘を見ながら「キャー」という叫び声を聞く。

「危ない！落ちるぞ！」

和也はじっと猫を見つめる。猫が徐々に和也へと変化していく。「あっ」と驚きに襲撃されて体は固まったようになる。伸ばした手はホームから離れていく。線路側へと吸い込まれていく感覚が和也を包み込む。

「電車が来てるぞ！」

「いやあ！死んじゃう！」

ホームから聞こえる声に和也は抵抗した。

——違う！俺は生きている！生きるんだ！そこに立ってるだろ！ホームにちゃんと立って……

銀色の鉄が線路への視界を遮る。ホームに入ってきた電車は急ブレーキをかけることなく通常通り停車し、ドアを開いた。電車の中に何事もなかったかのように人が入っていく。ホームに立って猫から変化した斉藤和也は電車に押し込まれ、吊革をしっかりと持って倒されないようにして立っていた。

駅員のアナウンスが響いて電車のドアが閉まり、何事もなかったかのように電車は発車した。